

シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ⑤〕

～ デカルトの独自の用法とその認識論 ～

村 上 吉 男

筆者は前号⁽²⁰³⁾で、デカルトが〈わたし（人間）〉の諸能力を、〈penser（思惟する）〉とした語で包括させ、〈理性的精神（*âme raisonnable*）〉の「先天的」諸能力にみなし、たとえばその一たる〈sentir（感じる）〉をして〈脳本体（理性的精神）〉から〈腺（精神 *âme*）〉へと向かう〈自動機械〉〈運動〉にさせるうえで、〈感じる〉をはじめとする〈思惟する〉〈自動機械〉〈運動〉は〈能動〉ではないことをみた。〈能動〉はだから、〈脳本体〉を出所にし、〈感じる〉の場合には〈腺〉とも関係する以上、一つの〈脳（精神）〉にとどまらず、「脳」全体、すなわち筆者の記す「精神」にゆきわたる〈運動〉になるといえる。

しかし「精神」の〈能動〉〈運動〉が〈自動機械〉であるとは何か。つまり〈自動機械〉が、一方で〈脳本体〉や〈腺〉以外の「脳」（デカルトが諸作品に書き込む〈脳〉は身体をあらわすはずである）の〈運動〉をさしたり、後段で語るごとき身体の〈運動〉を示したりするはまだしも、他方で上記した〈脳本体（理性的精神）〉や〈腺（精神）〉なる〈*âme*〉の各内部⁽²⁰⁴⁾での〈運動〉に適當するは、それ自体の表記を〈矛盾〉に陥らせはしないのか。しかして〈矛盾〉とせずば、彼に〈そのほかの自動機械（すなわち自分自身（自我）を動かすそのほかの機械）〉⁽²⁰⁵⁾といわせる〈自動機械〉は、〈自分自身を動かす〉〈そのほかの（思惟する）〉「精神」に対していかに用いられるとみておけばよいかということである。〈脳本体〉や〈腺〉を含めた「脳」全体をいう「精神」での〈自動機械〉は、〈思惟する〉ことが、たとえば〈感じる〉ことが即〈自分（わたし）自身を動かす〉ことにつながっていく。とどのつまり〈思惟する（感じる）〉は〈わたし〉であり、「精神」であることが指摘される（「精神」は繰返すが、〈脳本体〉と〈腺〉の各「部位」をさすだけではない。そこに〈神経〉や〈動脈〉などのすべてが含まれずにその機能を発揮できないばかりか、〈真理の探求〉を除いた他の二用法での、身体を含ませていう〈わたし〉にすらなり得ないで

あろう)。するとこの〈自動機械〉は〈自分（わたし）〉にかかわる以外に使用されないことを知る、すなわち「精神」全体にあっても、〈脳本体（理性的精神）〉や〈腺（精神）〉の各内部での〈思惟（する）〉によって、即〈自分自身を動かす〉ことが可能であるように〈運動〉するわけである。〈運動〉は「精神」全体でさえ、むしろ〈能動〉でしかないことを意味させる。だからこの〈自動機械〉が身体に用いられるそれと同じ語になるとはいえ、身体での〈自動機械〉が概して「受容」〈運動〉にすぎないのであれば、そこにこそ、「精神」における〈自動機械〉たる〈能動〉〈運動〉との相違が認められるのであり、〈わたし〉を前面に出す、その〈自動機械〉として捉えられなくば、それは〈矛盾〉を回避させる手立てを見失なわせようといひ得る。またこの〈自動機械〉は〈思惟〉して〈自分（わたし）自身を動かす〉さないかぎり、「精神」で始動しないのだから、これをもってしても、〈外来的な何か（事物）〉の身体感覚（諸）器官への「受容」にとって、たえざる〈運動〉をなす身体の〈自動機械〉と異なると区別できるはずである。にもかかわらず、「精神」や身体の各〈運動〉に、彼が同じ〈自動機械〉という語を使用したは何か。たとえば、彼が〈運動〉を「先天的」なそれとみなすゆえに、〈自動機械〉はその中味を質すは別にして、「精神」や身体に共通に用いられてしかるべき語になる必要があるからなのか。だがそうだとすると、この語を「精神」や身体にともに使用するはまぎらわしさを抜い切れなくさせるにちがいない。

さらに、〈心臓〉を中心にしての、ここでは〈血液〉を示す〈動物精気〉の「求心的」「遠心的」循環〈運動〉と、これまでにあって、デカルトが〈能動〉と〈同じ一つの事柄〉にならねばならぬと述べた当の「受容（〈受動〉）」とは、筆者のいう「まったく〈自動機械〉〈運動〉」に従わざるを得ないとみた。およそ、前者（循環運動）は〈血液（動物精気）〉を流す〈血管〉中の〈運動〉であり、後者（受容運動）は、前段の例でいう、〈sentir（感じる）〉が〈脳本体（âme raisonnée）〉から〈腺（âme）〉に〈神経を介して〉伝わる、〈能動〉の伝達に比して、〈外来的な何か（事物）〉が身体の内外的感覚諸器官のいずれかに、その〈神経を介して〉伝えられる〈運動〉になる。ただ「まったく〈自動機械〉〈運動〉」がこのように〈血管〉や〈神経〉にかかわることは、おのおの〈外来的な何か（事物）〉である外的対象（物）を異にさせてこよう。むしろ〈血管〉での外的対象（物）は食物や飲み物などであり、〈神経〉でのそれは〈外来的な何

か（事物）である。各外的対象（物）が受け入れられる〈血管〉や、とりわけ今問う〈神経〉にとってのその対象（物）自体（食物や〈外来的な何か〉がそれぞれ、〈血管〉や〈神経〉にそのままの「物」で「受容」されはしないことはすでに語っている）には、しかし当然のこと、〈思惟する〉〈わたし〉が含まれてはいないのである。この〈神経〉は身体の「まったき〈自動機械〉〈運動〉」の一として、「受容」〈運動〉を可能にさせる。筆者はこうした〈運動〉という語句で、「精神」での〈自動機械〉〈運動〉との違いを使い分けねばならなかった。繰返すが、身体の〈自動機械〉は〈能動〉〈運動〉を、要は〈思惟する〉〈わたし〉を有していないということなのである。だから「精神」の〈能動〉〈運動〉が〈自動機械〉と記されても、これを同じ語になるとはいえ、その身体の「受容（受動）」〈運動〉でもって置換させることはできない。「精神」の〈自動機械〉には何ら身体（的要素）が含意されてはならないのである。

② デカルトのいう〈ressentir〉について

しからは身体ではいかにして、〈受動〉は成るか、別言するとデカルトは「後天的」能力が、たとえば身体の〈sens（感覚）〉が身体の内外的感覚諸器官の一に表出すると捉えたのかである。筆者はこの問いに、上記②なる小見出し中の語〈ressentir〉を関連させることができる。なぜなら筆者の見方では、この〈ressentir〉がある身体感覚器官で受け入れられる外的対象（物）に「働きかける」と、〈受動〉が可能になるやいなや、そのある身体感覚器官に身体の〈sens（感覚）〉が表出せずにはおれなくなるといわねばならぬからである。しかしながら、一般的には身体的能力といい得よう〈ressentir〉も〈理性的精神〉の諸能力と同様、「先天的」能力である間違いないにせよ、たとえば彼のいう、いわゆる〈心身合一〉が成り立つか質すにあつては、〈ressentir〉が身体各感覚器官に当初より備え付けられたとみる能力なのか、そうでなければ、いずこの能力かを確かめずに、筆者はその〈ressentir〉について語り得なくなる。

20世紀以降の心理学的生理学的な、上記に関する知見はおそらく、デカルトのいう〈受動〉や〈能動〉の各〈運動〉を、身体（の内外的感覚諸器官）や精神（の諸部位）においてそれぞれ、「刺激」や「反射」の一連の〈運動〉として説くところにあるし、かつその際の「反射」をば、「刺激」による〈量（閾値）〉をもって表わすにちがいない。彼の生きた時代はそうように捉えられてはいな

かった。彼の理解はすでに記したことで諒解し得る通り、〈精神〉たる〈腺〉や〈脳本体〉ではもとより、身体（の内外感覚諸器官）においてさえ、「働きかける」〈運動〉という〈能動〉が〈受動〉を生じさせることに、したがって各〈精神〉や身体で各〈能動〉が各〈受動〉より先きに〈運動〉するとともに（〈受動〉とは、外的対象の身体や各〈精神〉への「受容」が〈能動〉の〈運動〉にあって、その都度〈受動〉として受け入れられる〈運動〉であった）、その一〈能動〉と一〈受動〉は身体や各〈精神〉にとっては、最初に身体へ、次に〈腺〉へ、そして〈脳本体〉へのごとき「求心的」順序にて現象するというにであった（前記した心理学や生理学では彼のいう〈精神〉の諸部位の名称と異なりをみせども、「刺激」や「反射」が今本文に述べた、身体から精神へという順序での〈運動〉を可能にすることは、彼の場合と同じであろう。かつたたとえば精神で「刺激」や「反射」が生じずば、身体での〈運動〉が精神に伝えられないし、精神に至る途中か、それ以前に消滅してしまうであろうことが予想される）。そこで筆者は、前号で主に〈腺〉と〈sentir〉の関係について説いたのだから、ここからは当然、前段に掲げおいた問いである身体内外の感覚諸器官と〈ressentir〉の関係を検討していかざるを得なくなる。

結語からいうと、〈ressentir〉は〈思惟する〉〈理性的精神（*âme raisonnable*）〉をいわば発信基地にした〈sentir〉の、身体で用いられねばならぬ能力に相当する。前回も多少触れおいた⁽²⁰⁶⁾が、筆者が再度以下のごとく断じるは、とりもなおさず筆者の意見にほかならない。まず、〈脳〉の一部位たる〈腺〉すなわち〈精神（*âme*）〉に対して「働きかける」〈能動〉能力は、〈理性的精神〉から「出る」〈sentir〉（あるいは〈imaginer〉）であったし、こうした用い方での〈sentir〉は、デカルトの諸作品にわたって散見される⁽²⁰⁷⁾。そして、「精神」（「脳」全体）を除く身体（の内外感覚諸器官）に対して「働きかける」〈能動〉能力には、既出引用文⑩中の〈voir（見る）〉と〈ouïr（聞く）〉、さらに註(194)註欄の〈toucher（触れる）〉など⁽²⁰⁸⁾のほか、〈ressentir〉があるとみたが、しかし〈ressentir〉は上記註(207)註欄の諸作品のうち、《MÉDITATIONS（『省察』）》にしか記述されていない⁽²⁰⁹⁾。〈ressentir〉がとりあえず身体能力と見立ておくならば、もっぱら身体について言及する感のある『人間論』や『情念論』にこそあってしかるべきであろうに、〈ressentir〉がこれらの作品に見出されず、『省察』だけに使用されるは彼が何かを意図したからにちがひなからう。筆者には意図が何かは計

りかねる。ただ、〈ressentir〉はたんに「身体的能力」として捉えるにとどまらないことが汲み取れよう。それに、実際『省察』に用いられることで、ここには〈ressentir〉がこの作品で何よりめがけたとされる〈真理の探求〉の、また「日常的用法」のばかりか、上記註(209)註欄に記したような「もう一つの真理の探求」の各認識論的思想の一能力に使われるはほぼ間違いでないことが諒解されるのである。

とまれ〈ressentir〉に関する結語によって、少なくとも〈ressentir〉は身体内外の感覚諸器官に「当初より備え付けられた」とされる能力ではなくなる、換言するとかくいう諸器官のいずれをも出所にする能力ではないことになる。なぜか。確かなことは繰返してでもいうと、〈ressentir〉が既出引用文⑰の〈voir(見る)〉や〈ouïr(聞く)〉に類するよりか、むしろこれらを代表させる語としての能力であり、〈voir〉も〈ouïr〉も「働きかける」能力だからして、〈能動〉であると理解されるにあるが、それでも人が〈ressentir〉を身体(内外の感覚諸器官)に配置される能力といい続けるならば、〈ressentir〉は当然身体的能力にみられるほかなくなるのに反し、その〈能動〉は「精神」のそれとのかかわりを遮断され、身体固有の、〈思惟する〉を有しはしない〈運動〉にしかなり得ないであろう(あるいは〈ressentir〉が『省察』だけに記されるのを重んじるならば、そこは〈真理の探求〉をめがける作品でもあるのだから、筆者はこの〈ressentir〉が精神の語を〈âme〉と相違させども、〈真理の探求〉の用法における精神(esprit)の〈sentir〉にかかわる能力であることを、上記「なぜか」の一解答にすることができるであろう)。これは身体が〈延長〉であるという見方からは一見正しくあろう。しかしその際、そこには〈そのほかの(思惟する)〉とは別の、たとえば〈思惟〉に関与しない〈能動〉が、そうした〈自動機械〉〈運動〉がさらになければならないことになろう。〈能動〉の〈思惟〉に関与しない〈自動機械〉はなるほど身体に適當した〈運動〉になるといってよいが、これと〈そのほかの(思惟する)自動機械〉との二つが〈能動〉であると捉えられると、それは完全に精神と身体を分離させてしまう以外なくなるはずである。

だがデカルトは断じてそのようには語らない。なぜなら彼のいう三つの用法のうち、〈真理の探求〉を除く、「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」の認識論的用法にあって、〈ressentir〉が身体に備え付けられた、たんなる能力としての、かつ精神と分断された、〈能動〉の〈自動機械〉としての〈運動〉にと

どまるままならば、彼の主張であるいわゆる〈心身合一〉は日の目をみなくなろうからである。〈ressentir〉の〈能動〉をそう捉えるのでなしに、筆者のいう「精神」の〈sentir〉たる、〈思惟する〉〈自動機械〉としての〈能動〉〈運動〉のいわば分身に見立ててこそ、〈ressentir〉は〈sentir〉とのかかわりを有し、身体に〈sentir〉の〈自動機械〉というその名称を併用させるとみることができた。だから〈受動〉をさす「まったき〈自動機械〉」ではない、この〈能動〉の〈自動機械〉は、「精神」と身体にまたがる一つの〈運動〉でしかあり得なくなった。かつ〈精神（腺）〉や身体それぞれに〈sentir〉や〈ressentir〉が「働きかける」ことは、各「認識の起こり」なる能力をばその〈能動と受動（たる〈運動〉）〉をして〈たえず同じ一つの事柄にせずにはおかない〉⁽²¹⁰⁾わけであった。さらに〈同じ一つの事柄〉とは思ひ、〈ressentir〉が〈sentir〉の分身として身体で「働きかける」能力となるために、「精神」と同様な〈思惟する〉〈能動〉〈運動〉でなければならぬはむろんのこと、上記した〈心身合一〉もこの〈ressentir〉において可能になる、別言すると〈理性的精神（脳本体）〉を「出る」しかない〈sentir〉の〈能動〉〈運動〉が、「精神」でなく、身体では〈ressentir〉となって身体に関与しないことには、〈心身〉の一つの結合の場合がなぜか彼に想定されてこないことまでを含意させるといえたのである⁽²¹¹⁾。註(211)も含むこれら以外で〈心身合一〉を理解しようとするは、シモーヌ・ヴェーユの言を待たずとも、〈不明瞭、難点〉に立ちあうしかない。しかれども身体に〈思惟〉をかかわらせるは、たえず〈矛盾〉に立ち向うほかなくなる。このことは彼女の指摘通り、〈日常的用法〉でも〈観念論と實在論は... 両立し... 相関〉⁽²¹²⁾するという見方に帰一する。彼はおよそ身体や〈精神（腺）〉の各「認識の起こり」の機序を、当時の実験科学を参考にして確認するのであろうが、しかしそこに〈思惟〉が注入されるからして、〈観念論〉を出ることを脱し切れないわけである。

以下に、上記デカルト諸用語に補足すべきを付け加えるとともに、筆者がこれらについて〈不明瞭、難点、矛盾〉に思われる点を掲げおく。

〈sentir〉と〈ressentir〉について

〈理性的精神（âme raisonnable）〉から「出」た〈感じる（sentir）〉が身体では〈感覚する（ressentir）〉たる〈能動〉としても「働きかける」とみるにせよ、それならそれでなぜ身体に対して、デカルトは〈ressentir〉でなしに、〈sentir〉を

適用させなかったのか。これは彼が示唆させよう「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」の各認識論での諸能力を使用分けする前提を無視してしまう愚問であろうが、しかし筆者には、彼が身体に〈sentir〉をそのまま当てはめ用いるとなると、およそ「精神優位」と〈心身合一〉という彼の主張の根拠が見失われると察知されるからして、ここに一度これらを確認することが肝要になるわけである。

諸能力はデカルトにあって「精神優位」を意図させられねばならぬこと

デカルトが身体に、実際用いている〈ressentir〉に代えて、〈sentir〉そのものをかわらせるように使うならば、身体も明らかに精神の司るところに、いや精神自体にみなされかねないであろう。だが「精神優位」とは精神に何かを対峙させ比べていえることであり、何かはもとより身体をさすしかない。だから「精神優位」を語る以上は、身体を欠いて問えないし、しかも「優位」は精神の能力の方が身体に仕掛けてはじめて成る、要はこの逆ではないことにある。ところが上記したように、彼は身体に〈sentir〉を関与させてはならぬとみたので、〈sentir〉のいわば分身と理解される〈ressentir〉を建て前として、身体用能力の代役に当てたのである。実質〈sentir〉の中味を有すると指摘せざるを得ない〈ressentir〉に書き換えられるは、書き換え自体がシモーヌ・ヴェーユのいう、既出引用文㊦㊧の〈デカルトラしき巧みな企て〉⁽²¹³⁾によると読むにしても、そこでさらに彼女に見抜かれるその〈不明瞭、難点、矛盾〉は拭い切れぬままに終始しよう。

〈ressentir〉は別言すると、「精神優位」を意図させる、精神から身体（身体から精神へではない）へ「働きかける」「能動」的能力であるために、〈思惟する〉〈自動機械〉〈運動〉として捉えられねばならぬということである。だからこの〈思惟する〉はすでに引用した、〈autre automate (c'est-à-dire autre machine qui se meut de soi-même)〉（そのほかの自動機械（すなわち自分自身（自我）を動かすそのほかの機械））⁽²¹⁴⁾に与する。筆者は〈そのほかの自動機械〉を〈思惟する自動機械〉と以前理解したからである。

しかし〈autre（そのほかの）〉の形容で示唆されることは〈ressentir〉にあって、筆者が〈sentir〉を〈そのほかの〉に当てはめ〈思惟する〉とみた、当の〈そのほかの〉と果たして同意か他意なのかである。〈ressentir〉を〈そのほか

の)に置換させるにしろ、〈そのほかの〉は単数表記ゆえに、一でしかないからして、〈ressentir〉は〈sentir〉と同じ〈そのほかの〉に組み込まれる見方も可能になろう。だが筆者は、〈ressentir〉がここでは精神(〈腺〉)ではなく、身体(内外諸器官)に向けて「働きかける」能力である⁽²¹⁵⁾と断じおくかぎり、これも〈思惟する〉でなければならない一方、身体に関係するはどうみても、〈sentir〉とは同じ〈そのほかの〉にはなり得ないように受け取るほかない。筆者にとって、〈そのほかの〉の表現はだから、〈不明瞭、難点、矛盾〉のいずれかをさす以外ではなくなるのである。〈自動機械〉が複数形なら、ことは別である。

それでもデカルトはなぜ、筆者が〈sentir〉と異なる〈そのほかの〉と理解する〈思惟する(ressentir)〉を立ち上げねばならなかったのかである。再度確認しておこう。それは、彼が〈sentir〉をして身体では〈ressentir〉の能力にあえていい換えさせたのも、今指摘している「精神優位」と、後述する〈心身合一〉とをねらいに定めおいていたからである。彼が自らの〈説〉において、身体を精神に従属させるごとく扱うは、「精神優位」がたえず念頭にあり、優先されるからにほかならない。「精神優位」は、精神と身体を保有させて解く「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」の用法にあってはむろんのこと、精神は身体(感覚)を〈考慮に入れない〉⁽²¹⁶⁾などの、精神のあり様だけが問われる〈真理の探求〉にさえ充当するもいわずと知れたことになる。

ところで三つの用法における各精神のうち、〈真理の探求〉の精神は身体を排除させるわけだから、〈脳〉を精神とみてはならない精神である一方、身体を〈考慮に入れる〉「日常的用法」と「もう一つの真理の探求」の各精神では、それぞれに〈腺〉や〈脳本体〉たる身体(部位)を充当させているが、果たして二部位とも「先天的」精神なのか、別言すると二用法の各精神は二部位のいずれかを生来的精神にさせておかなくてよいのかと質し得る。およそ両用法で精神が「優位」になると捉えども、その各精神に〈腺〉や〈脳本体〉という二部位が精神とされるままほうっておかれると、〈脳〉全体をさして精神というならいざ知らず(二部位はそこに含まれる)、二部位を同時に精神となす場合のこの精神は〈不明瞭、難点、矛盾〉のどれかとして受け取られるほかないからである。(以下数段落の証明で、〈脳〉全体も「精神」とみなくてよくなる。)

二部位のなかで「精神優位」であり、「先天的」「生来的」といい得る精神は、筆者にすれば、〈脳本体〉をさす精神、すなわち〈理性的精神(âme raisonnable)〉

になろう。〈腺〉をまた〈精神 (âme)〉というは、〈脳本体 (理性的精神)〉から〈出る〉〈sentir〉が〈腺〉に「働きかけ」、〈腺〉内で〈sentiment〉を産出せしめるときである。なぜかは〈sentiment〉がその都度、〈精神 (âme)〉の能力として生じるからである。〈sentir〉が〈理性的精神〉を〈出〉ない、つまり〈腺〉に〈神経を介して〉「働きかけ」ない場合、〈腺〉は当然〈脳 (身体)〉の一部位でしかない。そのとき〈腺〉は〈脳本体〉を「先天的」「生来的」精神と見立てるような精神にどころか、およそ精神にすらなり得ないわけである。

しかしここで再度、〈sentir〉が〈腺〉に「働きかけ」て、〈腺〉で〈sentiment〉を産出し、〈腺〉が〈精神 (âme)〉にみなされる場合、〈腺〉はいわば後天的精神になるほかないといっておく。〈腺〉が精神と捉えられた際、「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」の各精神には、〈腺〉たる〈âme〉と〈脳本体〉たる〈âme raisonnable〉が同居するのであろうか、別言すると上記二用法のそれぞれにおいて、本来精神なるものが一つしかないと断じおこなうならば、〈腺〉が精神とみられるとき、〈脳本体〉も〈理性的精神〉のままにあらうかということである。筆者は〈腺〉が「後天的」か否かにかかわらず、〈精神 (âme)〉とされるにあつては、〈脳本体〉を精神にすることができないと判断する。〈sentir〉という〈理性的精神〉の一能力（他に〈imaginer〉もあった）がこの精神から〈出〉た瞬間、〈理性的精神〉という精神の役割が〈sentir〉に託されるからして、〈脳本体〉はすでに〈脳〉の一部位であつて、〈理性的精神〉ではなくなる。これ以外の見方を取ると、二用法の各精神はそれこそ〈不明瞭、難点、矛盾〉のいずれをも脱し切れないのである。

次いで、今度は〈腺〉が〈精神 (âme)〉になるとされる要因を記しおけば、それはもとより、〈理性的精神 (脳本体)〉から〈出〉た、〈理性的〉とはいわせないが、いまだ精神の能力であらう〈sentir〉（または〈imaginer〉）が〈腺〉にかかわることにあり、〈腺〉が「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」にとって、対〈sentir〉（または〈imaginer〉）用の唯一の精神として、〈理性的精神〉に代わり用いられることを示唆させずにおかないし、〈L'âme ne peut avoir en tout le corps aucun autre lieu que cette glande (une petite glande) où elle exerce immédiatement ses fonctions (括弧内は筆者) (精神というものはこれがその機能を直接に発揮する小さな腺を除いて、身体全体のいかなる場所にもあることができない)〉⁽²⁷⁾がそう語らせてくるからである。とどのつまり〈精神 (âme)〉が

〈腺〉であれば、この〈腺を除いて、身体全体のいかなる場所にも〉ないと書くのだから、〈脳本体〉はもはや〈理性的精神〉とはいえないわけである。以上は筆者が、前段に勝るとも劣らない、シモーヌ・ヴェーユの指摘する〈デカルトらしき巧みな企て〉に導かれて推察し得る内容である。

また一方で、デカルトが〈脳本体〉を「先天的」「生来的」精神と理解せずに、たとえば既出引用文⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾⁽²¹⁸⁾に各記される〈思惟する〉諸能力はいかなる精神に属すと見て取れるのかさえ〈不明瞭、難点、矛盾〉に陥らせてしまう。むろんこれまで述べてきたことにより、〈思惟する〉諸能力は〈脳本体〉たる〈理性的精神〉にしかない。この〈精神〉が〈理性的〉と形容されるは、諸能力中の〈感じる〉(または〈想像する〉)という、およそ〈理性的〉とみられない能力が〈理性的精神〉から〈出る〉ことにおいて、二つ以外はまさに〈理性〉に与する諸能力となる謂であると推察される。そして〈感じる〉(または〈想像する〉)が〈腺〉に「働きかける」際、この「先天的」能力は〈理性的精神〉を〈出〉ては、〈理性的〉でなくなるにせよ、〈精神〉から発する一能力に変わらないとみれば、〈腺〉はその影響をもろに受け、〈精神〉としての〈sentiment〉を産出するという以上、〈âme〉にみなされなければならぬであろうと繰返しおく。したがって彼があたかも〈腺〉を〈感じる〉(または〈想像する〉)用の〈精神(âme)〉に見立てんとするこのことも、彼の「精神優位」の発想から生まれたにちがいないのである。

他方で、デカルトに示唆されようこの「精神優位」がゆえに、〈理性的精神〉から〈出〉た〈感じる〉(または〈想像する〉)の「先天的」能力が〈能動〉として、〈精神(âme)〉の名称が与えられる、〈脳〉の一部位〈腺〉にだけでなく、ときに身体(内外各器官)に〈外来的な何か(事物)〉⁽²¹⁹⁾が受容されるならば、その対象にもかかわらねばならなくなろう。この身体(の対象)に「働きかける」能力こそ、今質している〈ressentir〉であった(彼が〈sentir〉に代えるに、なぜ〈ressentir〉を用いたかについては、すでに筆者なりに証しおいたし、〈想像する〉の方は〈imaginer〉がそのまま身体に使用される)。そう想定しておかねば、筆者は〈ressentir〉を後述する、〈心身合一〉の一例として主張したりできはしない。なぜなら〈(理性的)精神〉の二能力の〈能動〉が身体に伝わらなくば、〈心身〉は〈合一〉にならないからである。

そこで〈理性的精神〉から〈出〉た〈sentir〉(または〈imaginer〉)がある条

件下でときに、〈脳〉の一部の〈腺〉に対してだけでなしに、〈脳〉から完全に〈出〉た際の身体に、すなわち〈脳（身体）〉以外の身体（内外諸器官）のいずれかに、〈ressentir〉（または〈imaginer〉）として「働きかける」ことを予測し、質しておかねばならなくなる。「ある条件下で」とはたとえば、〈腺〉に身体の〈sens（感覚）〉が、あるいは身体内外各器官に、前記した〈外来的な何か（事物）〉たる「対象」が受容されることを含意する。そしてこの〈腺〉ないしは身体内外器官それぞれに、〈sentir〉もしくは〈ressentir〉が「働きかける」ことで、〈腺〉にはもはや〈脳〉の一部位とはいわせない、〈精神（âme）〉となった〈腺〉の能力〈sentiment〉が、身体内外各器官には身体としての能力〈sens〉が産み出されくる。

〈脳〉から「完全に」〈出〉た、対身体用の能力〈ressentir〉の方は、筆者に〈sentir〉が〈腺〉にかかわる点で多少の異なりをみせると語らせたが、それでも〈思惟する〉に変わりがない〈そのほかの自動機械〉たる〈運動〉に従っている。この〈運動〉は〈sentir〉と同じく〈能動〉であるにもかかわらず、身体内外各器官に受容された「対象（外来的な何か（事物））」にかかわるから、〈腺（脳）〉に「働きかける」のではなくるし、身体への〈能動〉のおかげで、「受容された「対象」」は身体内外各器官ではじめて〈受動〉としての能力（身体の〈sens〉）をもたらしわけである。

だからデカルトは身体でも、本文註(214)の〈自分自身（自我）を動か〉し得ることをさして、〈自動機械〉が〈そのほかの（思惟する）〉になるといったのであり、その身体で実際に〈動かす（働きかける）〉能力、すなわち身体用の〈自動機械〉〈運動〉という〈能動〉の能力〈ressentir〉が不可欠になったのである。〈理性的精神〉を〈出〉た〈sentir〉が、〈腺（脳の一部位）〉には〈sentir〉として、〈脳〉を「完全に」〈出〉て達する身体内外各器官には〈ressentir〉として「働きかける」ための〈思惟する〉〈自動機械〉〈運動〉に捉えられねば、それぞれ〈腺〉における身体の〈sens〉が、また身体内外各器官における「対象（外来的な何か（事物））」が〈受動〉になり得なかったであろう。要は〈sentir〉とこの身体用の〈ressentir〉が同じ〈理性的精神〉を出所となすようにみえるからこそ、〈腺〉と身体内外各器官のおのおのにあらわれる〈能動と受動〉が〈同じ一つの事柄〉に見立てられるし、たとえばその〈ressentir〉にあって、これが〈思惟する〉〈自動機械〉〈運動〉たる「働きかける」〈能動〉であり、こうした

〈能動〉によってはじめて、身体内外各器官で「受容された「対象」」を身体の〈sens〉にする〈受動〉として惹起されることが可能になる。それを前提にせず、〈ressentir〉は〈sentir〉に属す能力となるつながりを見出せないどころか、デカルトが〈ressentir〉を〈sentir〉のほかに持ち出す理由や、〈思惟する〉〈自動機械〉〈運動〉に関与する証しを求めることすら不可能にさせるであろう（〈ressentir〉は「まったき〈自動機械〉」に従う〈運動〉であり得ない。すると彼は本文に記す以外の、〈ressentir〉用の新たな〈自動機械〉〈運動〉を提示したとでもいわせるのであろうか。否である。〈ressentir〉という〈運動〉は、〈sentir〉が〈理性的精神〉から〈出る〉〈自動機械〉〈運動〉にかさねあわせ語られるにすぎないのである）。

前段のことは既出引用文⑩⁽²²⁰⁾で証明される。そこに、〈わたしたちの感覚(sens)の諸対象〉は〈外的感覚諸器官(のいずれか)において、ある運動を引き起こし〉、かつ〈脳においてその同じ運動を引き起こす〉と記される。〈ある運動〉と〈その同じ運動〉はおのおの、デカルトの指示する〈外的感覚器官〉や〈脳〉で生じる。前者の〈ある運動〉は、〈わたしたちの感覚(sens)の諸対象〉を受容する、〈外的感覚諸器官〉つまり五官(感)の「まったき〈自動機械〉」〈運動〉によるし、彼が〈わたしたちの感覚(sens)〉と書いたことは、この〈ある運動を引き起こ〉したことにあるのだから、たとえば何らかの〈外的感覚器官〉の「受容」された〈対象〉に、筆者のいい続ける〈ressentir〉が「働きかけ」ないと、〈受動〉として捉え得る、〈わたしたちの感覚(sens)〉が、すなわち〈外的感覚器官〉における身体の〈sens(感覚)〉が成り立ち得ないことを含意させている。ここにはそれ以上の問題はない。

問題なのは、〈脳において〉の〈その同じ運動(を引き起こす)〉と述べられる方である。その際筆者は〈脳〉を〈腺〉であると受け取らずばなるまい。すると〈外的感覚器官〉で生じた身体の〈sens(感覚)〉が〈神経を介して〉、その「まったき〈自動機械〉」〈運動〉として〈脳(腺)〉に「受容」されるように伝わる必要があろう。このことも〈その同じ運動〉下にあるとされるならば、そうみるしかなかろう。ところがデカルトが〈脳(腺)〉⁽²²¹⁾で〈その同じ運動を引き起こす〉と語るに、それを筆者は身体の〈sens〉に〈sentir〉が「働きかける」謂であろうと解釈するのだが、しかし彼が何らかの作品で、身体の〈sens〉のまま〈腺〉を通り、「遠心的」に〈筋肉〉にまで伝わる例⁽²²²⁾を書き残してい

る以上、〈その同じ運動を引き起こす〉という際の〈その同じ〉とは果たして、〈腺〉にあって身体の〈sens〉のままで〈運動を引き起こす〉ことをさすのか、〈sentir〉を加えての〈運動を引き起こす〉になるのか、〈不明瞭、難点、矛盾〉きわまりないのである。ただ後者を適当としていえることは、〈sentir〉も〈ressentir〉と同様、〈同じ運動〉をする（〈引き起こす〉）と強調しておくならば、両者は少なからず同じ能力に与せずにおれなくなろう。

上記引用中の〈同じ運動〉という表現は〈外的感覚（諸）器官〉と〈脳（腺）〉なる身体器官と身体（脳）の部位への〈運動〉があることに対して使われたであろうが、この器官と部位のそれぞれにかかわる「先天的」能力が例の〈感覚〉にあって、〈理性的精神〉から〈出る〉〈sentir〉でしかないからこそ、〈sentir〉が〈同じ運動〉としての「働きかけ（能動）」を身体や〈腺（精神）〉になす際、身体用の新たな能力（sens）を産出させんとする「働きかけ」のうへでは、デカルトは〈sentir〉を、その〈sens〉に関与させるわけにはいかぬと考えたのか、〈ressentir〉で代用せずにおれなくなるし、〈ressentir〉も〈同じ運動〉になるかぎり、〈sentir〉の「働きかける」〈思惟する〉〈自動機械〉〈運動〉を伴わせるとみることができる。筆者はさらに、〈同じ運動〉を本文註(210)の引用文〈能動と受動はたえず同じ一つの事柄にせずにはおかない〉に当てはめ、以下のように理解し得る。〈同じ運動（能動）〉は身体諸器官に対してと〈同じ〉に、〈脳（腺）〉にも「働きかけ（運動せ）」ねばならぬことを示唆させるにしても、彼が〈同じ運動〉を「精神優位」とみなす〈運動〉に位置づけるかぎり、〈理性的精神〉を源とするこの〈sentir〉と〈ressentir〉を〈同じ一つの事柄〉に捉えることが課せられると同時に、〈能動〉によって〈受動〉が成るとも明かしおいたがゆえに、〈能動と受動は... 同じ一つの事柄〉として受け取られるほかなかったわけである。

「働きかける」という〈能動〉は〈理性的精神〉に与する諸能力のいわば特権であり、「精神優位」の確かな証しとなる。〈能動〉は〈理性的精神〉から〈出る〉〈sentir〉（または〈imaginer〉）でも同様であった。既出引用文⑩⁽²²³⁾に従っていうと、〈わたし〉（すなわち〈理性的精神〉）が〈en moi（わたしにおいて）〉〈思惟する〉とき、たとえば〈sentir〉が〈わたし〉を〈出〉（あるいは「完全に」〈出〉）ても、〈思惟する〉〈能動〉であるかぎり、〈思惟する〉を有して〈腺〉や身体諸器官のそれぞれで〈運動〉することができたのである。これが〈能動〉

の意味である。再度いうが、〈能動（働きかける）〉は、〈わたし（理性的精神）〉から生じるし、〈理性的精神〉にしかない「先天的」諸能力⁽²³⁾による各〈運動〉であり、また〈受動〉も、〈sentir〉を例にするこの「先天的」能力が〈腺〉に、その〈ressentir〉が身体諸器官におおの「働きかける」ことで生じる、換言すると身体諸器官や〈腺〉に各「受容」される〈対象〉や身体の〈sens〉が〈能動〉の方からみれば、各〈能動〉に「働きかけられる」ことによってもたらされるであろうと、さらに身体諸器官や〈腺〉に各「受容」されるは、後述もしよう、「まったき〈自動機械〉」〈運動〉に従うということであった。

〈脳〉における〈sentir〉と身体における〈ressentir〉との関係を今一度以下の数段に整理しておこう。〈sentir〉が〈脳〉の一部位の〈腺〉に「働きかける」と、その直前に〈腺〉に「受容」された身体の〈sens〉を、〈sentiment〉なる〈受動〉としての、〈腺〉の新たな能力となし、デカルトはこの「新たな能力」を産出する〈腺〉を〈精神（âme）〉と呼んだ。だが〈sentir〉は〈神経を介して〉、ときに〈腺〉だけでなしに、身体にも向かう能力でなければならなかった。そして身体内外諸器官には、これが〈âme〉になり得る〈脳（腺）〉以外の身体であるためか、身体に対しては〈sentir〉の「繰返し（再び）」となって「働きかける」ような〈能動〉すなわち〈ressentir〉が用いられるほかなかったのである。〈sentir〉が彼にとって、なぜ身体にかかわる不都合になるかは前述した通りであって、ここでは〈sentir〉が〈再び〉「働きかける」は身体である、要は〈再び〉は〈腺（精神）〉ではなく、身体の〈能動〉としてあることを意味させると再度いっておくしかない。

デカルトがたとえば、〈精神（âme）〉と〈理性的精神（âme raisonnable）〉という名称をおおの、本来身体たるべき〈腺〉と〈脳本体〉（各部位も人が付けた名称であろうが）に当てたのと同様に、〈sentir〉と〈ressentir〉についても、彼は〈理性的精神〉の「先天的」能力〈sentir〉を、身体内外諸器官にさえ「働きかける」「先天的」能力として適当させるが、しかし身体に向かう能力となるため、これを〈sentir〉に〈再び〉を加えるにすぎない類義語〈ressentir〉でもってあらわさざるを得なかった。そう捉えおかねば、〈sentir〉と〈ressentir〉が〈同じ一つの事柄〉に与することの、それでなくとも各能力の〈能動〉が各〈受動〉を惹起せしめて〈同じ一つの事柄〉にさせることの、そのことで各能力が「精神優位」を証すことの、さらに〈心身合一〉を可能にするものの彼の主張は

通らなくなるであろう。こうした主張が通るかは、この〈sentir〉と〈ressentir〉の関係が言葉の使い分けを駆使する〈デカルトラしき巧みな企て〉⁽²²⁵⁾によって成り立つ以外にないといえるのである。

とどのつまり、〈理性的精神〉を出所にし、そこから〈同じ一つの事柄〉とみなされて〈出る〉「先天的」能力の一例が〈ressentir〉と〈sentir〉であるとみずに、各能力がそれぞれ身体内外諸器官や〈腺〉に「働きかけ」て、身体内外諸器官での身体の〈sens（感覚）〉と〈腺〉での〈sentiment（感覚）〉たる各新たな能力を産出する（〈sentiment〉産出の暁は〈腺〉を〈精神（âme）〉と、〈sentiment〉自体を〈âme〉の能力といった）は、各「新たな能力」を〈感覚〉としてつなげる関係（身体の〈sens〉の〈腺〉への「受容」関係）をも失わしめるばかりか、各「先天的」能力さえ、〈思惟する〉〈自動機械〉〈運動〉になるとはいえ、もはやその関係なしでは、〈感覚する〉や〈感じる〉でかかわるのでない、別々の役割と意味を背負わされて関与しよう、摩訶不思議な「働きかける」〈自動機械〉〈運動〉にしかかなりかねなくなるわけである。

以上の見方と同様なことは、〈sentir〉が身体用の〈ressentir〉に置換されず、そのまま身体に使われた場合であろう。このとき身体は〈脳（腺）〉と同じく、〈sentir〉が「働きかける」部位であると捉えられるほかなく、そこに〈腺〉を〈精神（âme）〉に見立てさせ得るほどの〈sentiment〉が産出されては、デカルトに現に記されている〈ressentir〉は何か、この〈能動〉によって身体の〈sens〉が成ると書かれるは何か、定かにならぬ一方、およそ身体を〈精神〉の「新たな能力（sentiment）」で〈精神〉にみなすようにしては、身体は身体でなくなるからして、身体（ressentir）と精神（sentir）の関係を問う、かの「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」の各用法は存続し得るのか、身体を無視して「精神優位」は可能なのか、はたまた〈心身合一〉は質されるのか、疑うしかないであろう。だが前段の内容と同様な、こうした仮説やその各〈不明瞭、難点、矛盾〉を彼は回避させていたのである。

また〈ressentir〉が〈理性的精神〉の〈sentir〉に属しないと、したがって身体固有の「先天的」能力であるとみてしまう場合であろう。〈理性的精神〉は、その二能力を〈脳本体〉から〈出〉すにしろ、デカルトに精神の諸能力に属すといわせるだけで、それ自身に身体的能力を所有することはない。ただ〈sentir〉が〈脳〉を「完全に」〈出〉て、〈神経を介して〉身体（内外諸器官）に伝わる

ことで、身体用の能力すなわち〈ressentir〉になると指摘できた。それは精神(sentir)が身体用の〈ressentir〉として身体に関係することをさし、「精神優位」の謂であったからである。もし〈ressentir〉が当初より身体内外諸器官にある「先天的」能力であるとするならば、〈ressentir〉は身体だけの、精神に関知しない能力に、つまり〈sentir〉とかかわりがないのだから、身体で産出される「新たな能力(sens)」を〈腺〉に伝え、〈腺〉での「新たな能力(sentiment)」の産出に結びつかせ得ない能力になるだけであろう。それでは彼の主張である「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」の各用法が何をもって成立せしめられるかの見当がつかなくなる、したがって〈心身合一〉の可能性が見失われるはもとより、〈sentir〉による「精神優位」の根拠すら見出せなくなる。だがそうしたことはない。要は筆者はここでも、上記した仮説やその各〈不明瞭、難点、矛盾〉が彼にみられると断じてはならない。ということは〈sentir〉と〈ressentir〉が関係していることを結語とする以外にないわけである。

そこでデカルトがいわんとする〈ressentir〉を次のようにまとめておこう。〈外的感覚諸器官〉の一例を「目」に取ってみる。「目」にこの「まったき〈自動機械〉」〈運動〉に伴い「受容」される〈諸対象〉の一に対し、〈sentir〉における身体用の〈ressentir〉が〈能動〉として「働きかけ」た際に、その一が〈能動〉にとつての〈受動〉となる(ここに当てはめられるのが〈能動と受動はたえず同じ一つの事柄にせずにはおかない⁽²⁶⁾である)。〈受動〉は「目」において、「新たな能力(身体の〈sens〉)」が産出されたことと同意である。むろん「目」という身体(〈外的感覚器官〉)にあっても、〈見る(voir)〉すなわち〈感覚する(ressentir)〉たる〈能動〉の〈自動機械〉〈運動〉があり、同時にこの〈運動〉は以前指摘しておいた〈思惟する〉でなければならぬからして、〈sentir〉と同様、〈ressentir〉も身体にて〈見る(感覚する)〉と思われる⁽²⁷⁾になって「働きかけ」ざるを得なくなる。要は〈ressentir〉は、身体自体の能力ではない、別言すると身体自体は〈思惟する〉ことがないだけに、身体における〈見る(感覚する)〉と思われるをさえ〈理性的精神〉の〈sentir〉に属す能力にさせる。〈ressentir〉がこうした〈運動〉にあらずば、これが「対象」を〈受動〉にすることはできないであろう(「対象」を「目」で〈受動〉にするは繰返すが、〈ressentir〉が「目」に「受容」された「対象」に対し、これを身体の「新たな能力(sens)」にするために「働きかける」ことである)。

筆者はこうして、身体用の〈ressentir（感覚すると思われる）〉と〈脳（精神）〉用の〈sentir（感じると思われる）〉がそれぞれ、〈能動と受動〉を〈同じ一つの事柄〉にさせるばかりか、両能力の出所を〈理性的精神〉に見届けることでは、両能力自体が〈同じ一つの事柄〉に見立てられねばならぬことを、そのうえ〈ressentir〉と〈sentir〉をともに同じ訳語にしたのでは、各語は身体用か精神用かの区別を紛わしくする（だからデカルトは〈ressentir〉と〈sentir〉に分けて記した）ことを知る。

また上記した「身体用の〈ressentir（感覚すると思われる）〉」は、デカルトが語ってやまない「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」の各認識論において、その各身体自身の、たとえば「目」自身の〈見る（感覚する）と思われる〉能力ではなく、身体（「目」）への〈理性的精神〉の〈能動〉的能力によって可能にされるからこそ、身体よりか「精神優位」になるという彼の考え方がみられることに注意すべきである。これが〈真理の探求〉は当然のこと、「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」のあらゆる認識論でも「精神優位」がまかり通ると述べたゆえんである。だが〈真理の探求〉では〈sentir（ressentir）〉や〈imaginer（想像する）〉以外の〈penser（思惟する）〉すなわち理性なる精神の能力が優先されるはもはやいうまでもないことである。

それでも、三用法のいずれにあっても「精神優位」の考え方が共通してあることは、筆者に論ずるに足りない問いを想起させる。デカルトがどの用法を構築するにせよ、「精神優位」を基盤としたことに間違いなからうが、しかし彼はいったいその基盤をまずいかなる用法に見出し、他の用法に影響させたか、また各用法がその基盤を前提にして検討されたのか、さらに各用法の検討途中で、その基盤が都合よく注入されたかなどは知るべくもない。だから三つの問いすべては「論ずるに足りない」わけである。だがこの点を、最初の問いを例になお語り続けると、それは次のごとくである。たとえば〈真理の探求〉での「精神優位」をもとにすることにある。すなわちこの認識論は身体を〈延長〉に、精神を〈思惟〉に分離させるなかで、前記したような精神の能力「理性」の「優位」を示唆させていた。精神の能力を中核に据えることでは、他の「日常的用法」や「もう一つの真理の探求」の各認識論でも同じであった。したがって〈真理の探求〉での「精神優位」が他の二用法に影響した可能性はあろうといえるやもしれぬ。ただし二用法はおのおのにおいて、〈延長〉や〈思惟〉とい

う各〈実体〉を身体や精神に充当させずとも、これまでの指摘通り、身体は〈思惟〉しない、精神は〈思惟する〉ことになると同時に、〈心身合一〉をめがけねばならぬ手前、〈心身〉の関係を満たす能力をば「精神優位」としての能力〈sentir〉や〈ressentir〉、あるいは〈imaginer〉でまかなうしかなかったのである。

だがことは、デカルトが「精神優位」の考え方を何より先に〈真理の探求〉に見据え、他の二用法の各立ち上げの根幹に利用したと述べるだけで済ませられるであろうか。なぜなら〈真理の探求〉での身体（その感覚や想像）の排除の構想は、彼がそこに立つ以上、それ以前に、身体（その感覚や想像）に対してすら精神の能力が「働きかける」という、身体（その感覚や想像）のしくみを証したうえで成り立ってくるのでなければならぬからである。さすれば〈脳〉を含めた身体（その感覚や想像）のしくみを導入させたは、まずもって「日常的用法」の認識論になろう。しかり。かつそこでも「精神優位」であったことをみると、筆者は「精神優位」が「日常的用法」に一早く求められ、これをして〈真理の探求〉や「もう一つの真理の探求」を語る礎たらしめたと推察し得る。ただ「論ずるに足りない」問いに定かな解答は打ち出しにくい、それでも人が前記した他の問いやそれ以外にて、三用法の各「精神優位」を確かめ得るというならば、彼の打ち立てよう三認識論は有機的で体系的で、要は哲学的でなくなるのみか、彼はシモーヌ・ヴェーユが見抜いたように、哲学的であろうとする〈理想を夢見続けていたい思想家〉⁽²²⁸⁾であるほかならうことは確かなのである。

ところで〈sentir〉と〈ressentir〉の「両能力自体が〈同じ一つの事柄〉に見立てられねばならぬ」と記したことに戻り、筆者がなぜそうみるかに触れておく必要がある。それは、デカルトが〈理性的精神〉から〈出る〉「先天的」能力として、〈sentir (ressentir)〉以外に、前段までにときおり記した〈imaginer (想像する)〉を設定しており、この〈imaginer〉こそ〈想像する〉という「働きかけ」のまま、〈脳 (腺)〉にはむろんのこと、身体 (内外諸器官) のいずれにもかかわって用いられるからである。換言すると〈腺〉や身体 (内外諸器官) で各「新たな能力」(精神や身体各〈imagination (想像)〉)を産出すると解く⁽²²⁹⁾彼は、そのための、〈腺 (精神)〉や身体 (内外諸器官) の両方に「働きかける」同じ〈imaginer〉を用意していたということである。このように、〈imaginer〉の〈腺 (精神)〉や身体 (内外諸器官) に「働きかける」「しくみ」は、それが

〈sentir〉や〈ressentir〉の「しくみ」と同じにならないと、これもシモーヌ・ヴェーユのいう〈不明瞭、難点、矛盾〉を生じさせかねない。だから〈imager〉が精神用と身体用に使い分けられており、その「新たな能力」として産出されたあとの「しくみ」に、〈sentir (ressentir)〉の「新たな能力」のそれとは多少の違いをみせてはいても⁽²³⁰⁾、精神の〈能動〉的能力〈imager〉は〈同じ一つの事柄〉に収まらずにおれなくなる。それゆえこの例に〈sentir〉も、いかに身体では〈ressentir〉に書き換えられようが、ならうとみておかなければならないのである。

とまれ筆者が、〈ressentir〉の何らかの「対象」への「働きかけ（能動）」によって、身体内外諸器官の一にもたらされる「新たな能力」（身体の〈sens〉）を「認識の起こり」と指摘したは間違いではなくなる。身体の〈sens〉は〈ressentir〉すなわち〈penser（思惟する）〉にかかわるかぎり、「認識（の起こり）」となるからである。要は〈思惟する〉ことに関係あるはすべて「認識」といってよいのである。身体での「認識の起こり」はだから、「まったき〈自動機械〉〈運動〉」だけで生じない。そこに〈ressentir〉の「働きかける」〈能動〉があって成る。こうして〈ressentir〉は〈思惟する〉ことや「認識の起こり」に関係せずにおれないことを証明させるのである。

また〈ressentir〉も「先天的」能力であるとしたは、それが人間の生まれつき有する〈sentir〉と〈同じ運動〉⁽²³¹⁾をするがゆえである。なぜなら〈ressentir〉をはじめとする、〈理性的精神〉の諸能力がおよそ「先天的」でなければ、〈能動〉たることができないからである。そして〈ressentir〉が「認識の起こり」たる身体の〈sens〉をときに誕生させては、ときに身体の〈sens〉が〈脳（腺）〉に伝えられる。〈腺〉につなげさせる〈運動〉は当然「まったき〈自動機械〉〈運動〉」によるばかりか、この〈運動〉自体人間の「先天的」能力にみられなくもないが、しかし〈動物精気（血液）〉や〈神経〉を介して〈腺〉に伝達されるにしても、〈思惟する〉ことのない〈運動〉になるしかないといっておかねばなるまい。

しかも身体の〈sens〉が、今度は〈腺〉で〈sentir〉の「働きかけ」を受けて、〈腺（精神）〉としての「新たな能力」〈sentiment〉になる一方で、身体の〈sens〉をそのまま、〈脳本体〉の〈神経〉にではなく、その〈孔〉を通らせてから、〈神経〉に、かつ〈筋肉に導く〉⁽²³²⁾〈運動〉があるとされる。その際は身体の〈sens〉に〈sentir〉がかかわらないのはなぜかなのである⁽²³³⁾。

〔続〕

なお次号は、〈自動機械〉と〈心身合一〉の各まとめから、順次記すことにする。

註

以下の註の番号が(203)から続くのは、本稿が前号『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』の脱稿と同時に書かれたものであるからである。

- (203) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』新潟大学人文学部人文科学研究, 第114輯, 2004年, 参照。
- (204) 同上 P.P.67-69ならびに註(202)参照(デカルトの場合, 筆者のいう「精神」(〈脳〉全体)のなかで, 〈脳本体〉や〈腺〉が〈âme (精神)〉とみなされた。それは彼にとって, 〈思惟する〉がその各内部で働きかけることをさして, 〈âme〉と名付けるように思われるからである。〈腺〉については註(202)に記されること, 本文に後述されることで諒解され得よう。〈脳本体〉においても, すでに, その内部に受容される〈sentiment〉に対し, 〈脳本体〉の能力〈vouloir〉が働きかけて, 〈passion (情念)〉を生み出すといっている。
- (205) 同上註(175)註欄 P.70参照。
- (206) 同上 P.P.62-64参照。
- (207) 〈sentir〉はたとえば《DESCARTES ŒUVRES LETTRES》(Gallimard)中の《RÈGLES POUR LA DIRECTION DE L'ESPRIT》には3回, 《TRAITÉ DE L'HOMME》には25回, 《DISCOURS DE LA MÉTHODE》には4回, 《MÉDITATIONS》には45回, 《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》には47回, 《LES PASSIONS DE L'ÂME》には45回使用される(紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ③〕』P.73註(159)註欄(新潟大学人文学部人文科学研究, 第113輯, 2003年)参照)。
- (208) 既出引用文⑩や註(194)註欄とともに前回紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』の, それぞれ P.56や P.72にある。
- (209) 〈ressentir〉は本文に記したように, 《MÉDITATIONS》にのみ10回(P.279, 298, 300, 320, 321, 328, 331, 332(2回), 333。以上の頁は《DESCARTES ŒUVRES LETTRES》(Gallimard)により使用される。そのなかで筆者の主張す

る訳語〈感覚する〉、〈(再び) 感覚する〉や〈再び感じる〉に充当すると察知されるは、P.298とP.300以外の〈ressentir〉である。本来ならば、その充当すべき原文をここに引用してかくいう訳語が確認されるべきであろうが、それらにはしかし、前記註(208)の紀要で取り上げた、身体(の内外感覚諸器官)にかかわる際の〈感覚する〉(P.P.54-55, P.58参照)と、身体に「時間的経過」をみてかかわる際にいう〈(再び) 感覚する〉(P.63や註(199)註欄参照)と、〈腺〉か〈脳本体〉のいずれかでか〈再び感じる〉(P.63, P.65や註(195)註欄また註(201)註欄参照)とが想定されるからして、その各区別の試みが必要になろうし、そのために要するスペースは今以下にあるとはいえないほか、そこに〈l'esprit ressent dans le pied la même douleur... (精神は足(の傷)と同じ痛み(苦しみ)を再び感じる) (P.332)〉という用例もあつては、これこそ筆者の質さねばならぬ「もう一つの真理の探求」の用法が含まれるのであり、この用法にも、身体における〈感覚する〉か〈(再び) 感覚する〉があるか、また〈esprit〉における〈再び感じる〉があるか(註(187)註欄参照)が検討されないではおれぬがゆえに、以上は次号以降にあらためて問題提起せざるを得ないとここは断わる以外にない。

(210) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』P.54註(174)参照。

(211) 〈心身合一〉がデカルトにおいて成り立つとされる他の場合は、これまでの複数の紀要にて明らかにしたように、身体での「認識の起こり」(ここで「認識」といえるのは繰返しいうが、本文に記した〈ressentir〉が〈sentir〉の分身であるがゆえに、〈思惟する〉にかかわらざるを得なくなるからである)なる能力〈sens〉が〈精神(腺)〉に伝えられて、その〈腺〉の身体の〈sens〉に〈理性的精神(脳本体)〉から〈神経を介して〉「出」た〈sentir〉が「働きかけ」て〈精神(腺)〉の〈sentiment〉を生じさせることにあつた。要は〈腺(精神)〉における身体の〈sens〉の〈sentiment〉化を〈心身合一〉の他の場合の証しとしてみてきた。

(212) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』シモーヌ・ヴェーユの引用文◎, P.P.17-18, 新潟大学文学部人文科学研究, 第110輯, 2002年, 参照。

(213) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕』P.P.27-28, 新潟大学文学部人文科学研究, 第112輯, 2003年, 参照。

(214) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》(PREMIÈRE PARTIE) P.697 (ART 6) 参照。(またこの引用はすでに、紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』P.54註(175), ないしはその註欄, P.70に記される)。

- (215) 〈ressentir〉には、身体用の能力となるほか、すでに語ったごとく、精神（*âme raisonnable*）における「時間的経過」にあって「働きかける」精神用の能力がある。これについては次号以降を参照のこと。
- (216) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』シモーヌ・ヴェーユの引用文㉔P.17参照。
- (217) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅱ〕』引用文㉔P.73新潟大学人文学部人文科学研究，第106輯，2001年，参照
- (218) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト（Ⅳ）』引用文㉔㉕㉖と㉗P.1-2 新潟大学人文学部人文科学研究，第108輯，2002年（または紀要『なぜ感受性なのか（3）』引用文㉔の㉔㉕と㉖P.1-2，同上第94輯，1997年）参照。
- (219) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ②〕』シモーヌ・ヴェーユの引用文㉔中の語句〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉をさす。P.105 新潟大学言語文化研究，第9号，2003年，参照。
- (220) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』P.56-57参照。
- (221) 筆者がここでいう〈脳〉を〈腺（H）〉とみるのは、〈腺（H）〉と〈sentir〉が関与せざるを得ない、既出引用文㉔（紀要『デカルトにおける理性と感覚（4）』P.68 新潟大学人文学部人文科学研究，第101輯，1999年参照）を取り上げていたからである。
- (222) たとえば〈腺〉で〈sentir〉の「働きかけ」を受けないで、身体の〈sens〉のままにあり、それが〈筋肉〉にまで伝えられるとしたは、既出引用文㉔㉕（紀要『デカルトにおける理性と感覚(5)』P.60 新潟大学人文学部人文科学研究，第103輯，2000年参照）である。このことを筆者も、紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅴ〕』（新潟大学人文学部人文科学研究，第109輯，2002年）のP.42-43やP.58，ならびに紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』P.57-58に主張している。
- (223) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』P.56参照。
- (224) 本稿註欄中の註(218)参照。
- (225) 本稿註欄中の註(213)参照。
- (226) 本稿註欄中の註(210)参照。
- (227) 本稿註(223)参照。
- (228) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕』P.29参照。
- (229) René DESCARTES *LES PASSIONS DE L'ÂME* (PREMIÈRE PARTIE) P.705 (ART 20. Des imaginations et autres pensées qui sont formées par l'âme) P.706

(ART21. Des imaginations qui n'ont pour cause que le corps) 参照。(筆者はすでに、紀要『デカルトにおける理性と感覚(5)』で、わけてもART 21.を⑩②(P.56), ⑩④(P.58), ⑩⑪(P.71), ⑩⑨(P.67), ⑩⑩(P.68)の順序で掲載し、各引用文を分析している)。

(230) 身体や精神での各「新たな能力」〈imagination〉として産出されたあとの「しくみ」については、本稿註欄中の註(229)に記した紀要参照。また身体や精神での各「新たな能力」〈sens〉や〈sentiment〉のそれについては、紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅴ〕』参照。

(231) 本稿註欄中の註(220)参照。(ただし註(231)としていう〈同じ運動〉とは〈sentir〉の〈能動〉と同じように、〈ressentir〉の「対象」に「働きかける」〈運動〉をさし、註(220)に掲げられた引用文⑩⑧の〈同じ運動〉の意味と異なることに注意。引用文⑩⑧の意味は本文後述か、または註(222)参照)。

(232) 本稿註欄中の註(222)の引用文⑩⑦参照。

(233) この未解決の問題は身体の〈imagination〉とあわせ、後日の『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅵ〕』で検討する。